みんなにやさしい、特別支援教育（10）

◆目からの情報を加えて話す

Ｅ先生の教室に行くと、電子黒板を使った授業が行われていました。子どもたちは目新しい機械に興味を持ったらしく、熱心に授業を受けていました。

私たちが知ることのできる情報の大部分は、テレビや新聞など視覚によるものです。「見ることで得られる情報」は、聴いたり触ったりすることなど他の感覚で得られる情報を補い、認知をより確かなものにする情報なのです。

ですから、毎日の授業において教材や見本の提示など視覚情報を活用した支援は、子どもたちの理解力を高めるうえで大変有効な手立てです。子どもたち一人ひとりにとって、分かりやすく、いきいきと活動できる授業実践をしていきたいものです。

◆教室前面掲示はシンプルに

倉敷市立短大教授の平山諭氏は次のように述べておられます。

「ＡＤＨＤやＬＤの子どもは、情報処理能力が弱いことから、できるだけ刺激の量を減らすとよい。」と。それは、前面に刺激物があるとそちらに気が行ってしまい、授業に集中できなくなるからです。

校内を回っていると、どの教室も前面の壁には、意匠を凝らした学級目標や子どもたちの作品などの掲示物が飾られています。

Ｅ学級や６年生の教室などでは、子どもたちの作品は後ろの壁に掲示され、前面は最低限の掲示物だけのたいへんシンプルなものになっています。これは、学習中、前面の壁の掲示物によって注意散漫になるのを防ごうとい配慮からです。また、余分なものがないために、黒板の文字が一層くっきりと見えます。

教室環境も特別支援教育の視点から見直してみると、いろいろ改善の余地がありそうです。